

## 第4回「学校支援地域本部事業運営協議会」議事の概要

### 1 日時

平成22年2月16日（火）13:30～15:30

### 2 場所

県庁7号館742号室

### 3 出席者

委員	佐野 晃一	(宮崎市立住吉小学校)
委員	高橋 利行	(宮崎大学教育研究・地域連携センター)
委員	大山 茂	(清武町立清武中学校)
委員	永友 政晴	(県立宮崎農業高等学校)
委員	東 正剛	(宮崎市教育情報研修センター)
委員	川添 正浩	(松岡・川添法律事務所)
委員	高木かおる	(県PTA連合会)
委員	柳田 薫	(西都市自治公民館連絡協議会)
委員	白間 守	(退職校長会事務局)
委員	尾崎 太朗	(住吉地域総合型スポーツクラブ)
委員	山口 晃司	(JA宮崎中央会)
委員	上田ヒトミ	(児湯教育事務所)
委員	橋本 耕二	(都城市教育委員会生涯学習課)

合計 13名

県生涯学習課 : 興梠課長、江田補佐、坂上主幹、島名主幹  
釘宮社会教育主事

### 4 開会行事

- 課長あいさつ
- 日程説明

### 5 説明

- 各本部の事業実績報告について
- アンケート調査の結果について

### 6 協議

- 本年度の成果と課題について
- 次年度の方向性について

### 7 閉会行事

### 8 議事

- (1) 事業実績等の説明（事務局から）
- (2) 説明に対する質疑・応答
- (3) 協議

## 【本年度の成果と課題について】

- (委員長) 各本部が本事業の課題に向かって取り組んでいる。今後は、学校や地域の意識の高揚が課題である。
- (事務局) 各地区での取組の成果をどのように学校へ広げるかが課題である。
- (会長) 地域代表のアンケートから、地域の行事の参加者に偏りがみられる。
- (事務局) 地域の行事への参加者が固定されている。子どもだけの参加など保護者が参加しないことも課題である。
- (委員長) 延岡市では、企業や企業OBが参加する例もあるが、企業等の意識も変わってきたのだろうか。
- (委員長) JA、農業団体を含めて、社会貢献することが企業の価値を高める。利益を求めるだけでなく、目に見える形で地域貢献しようとしている。また、地域貢献をすることが求められている時代であるといえる。
- (事務局) 旭化成の取組であるが、地域に貢献する意識を持たれている。CSRを大切にしている流れができてきており、延岡市を中心として盛んになってきている。企業は、人材、施設等豊富な教育的資源を有しており、その活用を図る新規事業を検討し、議会にも提出予定である。
- (委員長) 地域で子どもたちが遊ぶ姿が見られなくなってきた。学校の休み時間を使って子どもと遊ぶ活動や、決まった時間以外のボランティア活動も大切ではないか。
- (会長) 住吉では、昼休みなどを使った体力向上活動等に取り組むたいと考えており、ボランティアの活用についても検討している。
- (委員長) 学校の時間帯の中で、どの時間帯にボランティアに入ってほしいかはそれぞれの学校で違う。そのようなニーズを調べることも大切ではないか。
- (委員長) 学校のニーズとボランティアのニーズが合わないし、学校の時間とボランティアの時間のずれがある。何時何分に来てくれと言うのがボランティアにとっては負担になる。
- (委員長) 近くの中学校から、ボランティア募集の案内がきたが、私にとっては中学校のニーズがとても高かった。保護者の参加についてもう少し積極的にという意見があったが、30代、40代は働き盛りであるので、やむを得ないのではないか。「できる人ができる内容を、できる時間に」が長続きの秘訣である。
- (委員長) 三納地区の取組は、学校支援地域本部事業から始まったのではない。地域づくり推進協議会が既にある。そこにはコーディネーターの機能がある。後はどう学校が関わるかである。取組のほとんどはボランティアで活動している。子どもの見守り活動などは、当たり前になっているなど、地域づくりが進んでいる。学校はこのような体制を利用してほしい。西都市は地域ごとに5箇所の「地域づくり推進協議会」が発足している。今後は、その中に学校支援地域本部事業の機能やコーディネーターの機能を入れていきたいと思う。
- (委員長) 昼休みの時間帯は中学校では事故が多いことも心配である。先生方にとっては、昼休みに生徒と遊んだり、生徒の休み時間の状況を把握したりする時間がとれない状況である。放課後、部活動にボランティアが入っているがうまくいっているので、できれば昼休みも入ってほしい。
- (会長) 学校がしっかり計画をもっていれば授業以外にも計画的に入ってもらえ

るのではないか。小学校の職員も放課後には余裕がない。

- (委員) アンケート結果からも挨拶ができるようになったなど成果が出ているが、事業自体の成果の検証については、長いスパンで行うことが大切である。その地域で、子どもの健全育成と地域づくりができることが大切である。保護者世代もいろいろと大変である。保護者同士もどう繋がっているか、方法が分からないということもある。太くとは言わず細くてもいいから長く繋がるような取組にすることが大切だと思う。
- (会長) コーディネーターの連絡費など個人的な支出もあり、金銭面についても負担が大きくなっているので配慮が必要である。三納地区では、地域の中にコーディネート機能がある事例は参考になる。
- (委員) アンケート結果からも本事業の成果はあるが、教師と子どもたちとの対話の時間が増えていない。教師が子どもたちと話す時間が確保できても、個別指導など別の業務に振り分けられている。教師と子どもたちの向き合う時間の確保というよりも地域づくりを本事業の目的ととらえていいのではないか。
- (委員) 取り組みやすいものと言えば、読み聞かせ、登下校の見守り、昔の遊び、そもそも先生達がしていたものではない。いろいろな体験は、地域の方が参加して新しくできたものである。教職員に時間的にゆとりができたわけではない。あいさつは良くなったが、見守り、地域の方が学校に入ってきて必ずしも教職員のゆとりをつくることには結びつくわけではない。教職員の負担減になる分野とは領域が違うのではないか。学校支援地域本部事業では、どこまでやっていくかを明確にすることが大切である。コーディネーターの人件費も全てまかなえない。やり方を抜本的に見直すことも必要である。
- (委員) アンケート項目のきまりを守ることは事業のねらいだろうか。アンケートも幅広くとっているが、アンケートの項目もねらいに応じて整理することも大切ではないか。

### 【次年度の方向性について】

- (委員) 本事業を通して、学校が地域に開かれた。地域の人も、地域で育てなければならない。学校支援地域本部事業は学校内の支援だけでなく、地域を含め学校外で子どもたちの活動や教育を支援することが必要ではないか。
- (委員) 地域との連携、学校支援がうまくいっていないところを対象にしてすればいいのではないか。すでにそのような体制ができているところには学校以外もどんどん進める。できない地域は、行政側が支援して仕組みづくりを行うというようなメリハリを付けた取組が必要ではないか。予算があるないは関係なくできるようにすることが大切である。
- (委員) P T Aがなぜ地域ボランティアに参加できないのかという意見もあったが、保護者には仕事もある。地域全体で支援するという大きな視点からの共通理解が必要である。保護者が来なくてもいいから、地域の人だけでもやろうというのが地域づくりである。
- (委員) P T Aもできるところで関わりたい。地域は、住んでいるところだけでなく、保育園や仕事の関係も含めて地域である。地域に住んでいる人だけ

でなく地域に関わっている人々も巻き込むという事業の進め方も大切だと思った。

(委員) 成功事例を集めて、広げていくことが大切である。どんな取組がなされているか知らない人たちもいる。県で実践報告書を作成し、学校へ広げてほしい。

(委員) 町民大会の中で、地域で子どもたちに声かけをすることで、逆に子どもたちから元気をもらおうという意見があった。地域の方は地域のために貢献するとやりがいを感じる。地域への説明は、初めは、先生たちが子どもと向き合う時間の確保としていた。これは、ボランティアの方々からの理解が得られないこともあった。それで、自分のもっている力を生かしてみませんかということを前面に出して説明をすると共感が得られた。

学校の意識改革が必要である。先生が本事業の目的を十分に理解していない面もあるのではないかと思う。成果を浸透させて、学校全体で活用していくことが大切である。平成23年度以降に予算が付かなくなれば、PTAから支出するとか、コーディネーター業務自体をボランティアでお願いするということも考えなくてはならない。

(委員) 地域と学校が仲良くなった。この事業を推進する上では、学校のニーズを伝えることが大切である。そのためには、チラシ配付だけでは効果がない。学校に実際に来て話し合ってもらい組織的な取組が大切である。そのようなことを進めていく上でもコーディネーターの役割は重要である。

(副会長) コーディネーターの在り方として、人ではなく組織や地域に機能も持たせることが細く長く続くことにもつながる。お金はあるからではだめである。どこまで何をやりたいかを示すことが大切である。そのためにもお金や活動時間を含めて、学校のニーズを外に出すか伝えるかも大切である。学校のニーズは子どもたちのニーズである。言いかえると子どものニーズとは、先生からみた子どもに必要なニーズであるとも言える。これが大切である。子どもの笑顔が本事業の推進剤である。決してお金ではない。教師が子どもとふれあう時間の確保というのは目標ではなく、教師にとって、子どもの笑顔がたくさん見えるようになることが本事業の目標ではないか。一緒にいる時間だけではなく、子どものことを考える余裕や時間が増えることが大切である。アンケートなどの中で、子どもとの時間が減っても、個別指導ができなくても、地域の方が関わっている。つまり、地域の中で子どもがよりよく育つ環境づくりにどう繋げていくかが大切である。このことを目標に続けていく事業になればいいと考える。

(委員) 放課後子ども教室など他の事業との連携が大切ではないか。お互いに連携することで相乗効果が生まれる。これを視野に入れて進めることが大切ではないか。

(委員) 細く長くが本事業のキーワードではないか。